燕石十種

夢乃浮橋

四輯

貳上

672
32

679
32

燕石十種第四輯卷二

夢乃憂橋卷上

江戸書僧　活東子輯

題詞

冨岡神會大江頭岸上連棚岸下舟戰車超乘靈
巖島舷服新裁永代洲士女喧闐溢九逵虹橋天柱不知危摧頹共委江
魚腹歌火炎涼變一時累々遺骸曝路隅水卿秋社輟歡娛如狂一國人
皆散橋斷江天缺月孤

杏花園

南畝

夢乃憂橋　發端

第四十六代聖武天皇

次の御門聖武天皇とゆゝしき文武天皇の御子なり養老八年二月四位より叙給御年五歳
宮の御子なり養老八年二月四位より叙給御年五歳
年あり年号神亀とかゝれしき二年ゝにとゝのこりかんゝの
ゝ稲をもてきたりき是よりもゝ月ゝ出ぬ出ぬ三年と
七月ゝ天皇をいのるゝ所ゝ御祈念ゝ心科寺れうもふ高人金堂
をべて給ゝ御ゝ年ゝ碁菩薩山辺の橋をはらてゝ法会
をまうけて法養ゝ給ひしふ像ゝ大水出て流れ人多くなりき

右水殘ふ出

今貞和五年多くのふゝぎおつゝ中ふ治中ふ田楽を敬ぶこと法ゝ
ゝ大樹是を興ぜゝ事又類あゝ古を万人集を堂ゝ処々
是ゝ多ふ婚費を関東ゝ侍御門好ゝ敬ひゝふ先代一流断

絶ゝぬゝゝゝぬ事ゝゝと絶ゝ中ゝ

同年六月十日拝殿の御門有ゝふ四条の橋をゝゝさんゝゝ新座如座の
田楽を合せ老若をもて能ゝゝゝ能ゝゝゝ四条河ふ橋をゝ
希代の見物ゝゝゝゝ貴賤の男女ゝゝ斜ゝゝ公家ゝ拝福
大臣家門流八當座を梶井二品法親王武家ハ大樹是を興ぜゝれゝゝ真
以下の人ゝゝゝゝ及ゝ郷相雲客法家の侍神社寺堂の神官僧侶ふ
まて我者ゝゝと撥殺を打五六八九寸の安の那ゝどを鐫貫ゝ圍八十三間
ふ之室臣室ふ細上物もおびゝゝゝ要ゝゝ中略ゝゝ将軍の御撥殺の
辺ゝ厳殺女房の鉢費の書ゝゝ百ゝゝゝ百ゝゝふ扇を以ゝ幕を揚ゝゝ
大物の五六ゝて打ゝゝ撥殺傾き立て以ゝ
九形ふ将碁例ゝゝゝゝ一度ゝゝゝ倒ゝゝ若年の人物た
歳ゝゝゝゝ打数ゝゝ者ゝ数ゝゝ
奪て迎ゝゝ有見ゝて切ゝ留ゝゝ或ハ腰掛ゝ打ゝゝ

られ或は己と抜る太刀長刀にて此彼を突貫れて血にまみれ或は湧せる
茶の湯に身を焼喚叫ぶ只衆合叫喚の罪人もかくやとぞ見へたりける田楽
は鬼の面をきながら装束を取て逃る盗人を赤き髪を振て追て走る
人の中より若党は是女房を擔負て逃る者を抜物の鞘を外(ハヅシ)て追懸る返
し合て切合声もあり切られて朱になる者も有修羅の闘諍獄卒の呵責
眼の前にあるがごとし梶井宮も御腰を御損ぜさせ給ひけりと聞えしかば
一首の狂歌を四条河原に立たりける

釘付にしたる桟敷の倒るゝは梶井のみやの不覚なりけり

又二条関白殿も御覧じられけるを

田楽は将棊倒しの桟敷には王斗こそのぼらざりけれ

是程事に興ぞいかさま天狗の所行にぞ有らんと思合て後よく案ずれば
山門西塔院釈迦堂の長講所用有て下る道に山伏一人行合て只今
四条河原に希代の見物の候なるを御覧候へかしと申ければ長講曰己に日中に成候
又用意の桟敷なんども候はねば只今よりは其庭に臨候とも中々いかで入候べきと
申せば山伏中々安く入奉るべき様は只我後に付て歩まれ候へとぞ申ける長講
実も聞ゆるが如くならば希代の見物成べし されば行て見ばやと思ひければ
山伏の後に付て三足計歩むと思ひければ是は早四条河原に行至りぬ其中
門の口折程に成ぬれば嵐戸の口も塞て入べき身も無しいかにして内へ入候
べきと悦れば山伏我手に取付せ給へ飛越て内へ入候はんと申す実しかるべしと思ひ
うしろ手に取付たれば山伏長講を小脇に挟て三重に構たる桟敷を飛越
飛越て将軍の御桟敷の中にぞ入にける長講座席座中の人々を見るに
皆仁木細川高上杉の人々なりでは交りたる人もなかれどもいかで此座に居る
居きと躊躇しける時を見て彼山伏忍びやかに苦しかるまじきぞ只それに
て見物し給へと申す長講此侭で有らんと思ひて山伏と並て将軍の対座に
居たれば種々の献盃擬しの美物盃の始るごとに将軍御対座の山伏と長講とに
只代りて請し始給ふ所に新座の楽屋より猿の面をきて御幣をさし上

梅の花ゝ樹を一元ゝんでい梅ゝを踏んでハ山幣を打振ゝ神ゝ程ぞふ跳出ゝり
上下の接殿見物元是を見ゝ〳〵座殿ゝも涙を面白や悦ぶゝ我死ぬや是助
すと嘶呼ゝ〳〵感ぜゝ声ゝ時斗ぞの〳〵究ゝゝゝ時彼の伏長請ゝ耳ゝ耳ゝゝゝ
除ゝふ人の物狂〳〵げゝ見ゆゝゝ惜ゝふ肝疲ゝせて奥を強せんぞゝゝ驚ぎ
給ゝと云て座ゝゝゝて或接殿の拵を忘いや〳〵と推とゝ〳〵ゝゝゝ二百除軒の
接殿ゝゝ天物倒〳〵ゝ逢てゞゝ外ゝゝゝは辻風の吹ぞとゝ〳〵ゝゝ神ゝ今度接殿
の〳〵神ゝは山脇を廻されゝゝゝや彼接殿崩ゝ〳〵ゝ死ゝゝ事ハ六月十日
ゝゝゝ次の日終日終夜大雨車軸を降〳〵法水盤石を流〳〵此日のゝゝの死人
汚穢不浄を洗流〳〵十日の祇園の神幸の行列ゝゝ天就八部衆〳〵
天神の威を助ゝ清浄の法雨をそゝぎゝゝ有ゝゝゝゝし松なり

右太平記巻二十七に出

今出川家今川家毛利家北条家南都天正本並云又四條河原に札ヲ立

去年ハ軍今年ハ接殿対死ノ所ハ同ク四條ナリケリ

右参考太平記に出

勸進ノ田楽猿楽接殿に出ル事ハ前〳〵ハ一宮一職に至ル程ノ人不望其外宮廷代
二條接殿初テ見物セシメ給門跡ニハ梶井門主同ク今出給其後二家ノ輩
并弦門跡見物連綿ナリ雖然近衛殿一條殿ハ未ダ出給ハズ門主ニ出ル御室勇
不令出給一年田楽接殿多ク崩レテ見物ノ道絶間命其接殿三條猿殿
以下已家ノ人〳〵多ク令出接殿ヲ問何者カシメリケン落書ニ

田楽ノ将棊ダヲシノ接殿ニハ王斗コソ登ラザリケレ

同接殿ニ梶井宮今出給ノ落書ニ

打付ニシタル接殿ノ破ルヽハ梶井ノ宮ノ不覚ナリケリ

其ハ此ハ接殿ナドヘサリヌベキ人ノ出タルハ不可然事ト弦人思ヘリ仍テ落書
ナドモ有ケルニヤ當代ハ出ザルヲ雖トス

右恵命院門大臣権僧正海人藻屑に出

神龜三年丙寅行基菩薩造山崎橋故老相傳云造橋畢後菩薩於

橋上大設法會洪水俄至橋流人死粗其数云〻

右扶桑畧記ニ出

屋代弘賢忍當作輪忍池云普通の本鉄巻の所かり

あれい尾張國大洲の真福寺ふ蔵をる所乃古抄本ヨ

據〻ちらしたるそのををらせ〻温故堂ふのこあり

山崎橋
與藏考

永代橋破損圖

冨岡八幡宮　又鶴河八幡共　別當　大榮山永代寺金剛神院

中興開基周光阿闍梨

鎌倉鶴岳同社　左右　伊勢　春日

神躰菅神の御作源頼政是を崇む其後千葉の家に移り豆利尊氏
（傳りそれより鎌倉基氏持氏同管領上杉家敬〻太田道灌ふか〻信ぜ
ざり其後寛永元年のころ長感法師霊夢の事あるゝ永代宮ふ宮
所建立一同八年にあるゝ巧米就に同二十年八月十五日初て宮殿ゆ
慶安四年の比法勢貴尊ふおろせゝ宮寺とあるゝ同年の秋神前ゆ
流鏑馬をもよふす是鶴岡の法式をうつすとゆり
東鑑二卷曰治承五年辛丑五月十三日為鶴岳若宮巣作找丈事有其沙汰
就中實平大庭平太景能等為奉行又曰同年七月八日流鏑馬左右奏之
同被召若宮巣作　下畧
東鑑九卷文治五年四月三日鶴岡祭二品御參宮馬場儀馬長十五騎流鏑
馬十五騎　競馬　三番　下畧
又礦石集云和別生駒寺の同ふ宝心和尚正保三年十八年ふして永代寺
開光阿闍梨の弟子とゆり寛文四年臘八の夜宝心和尚霊夢の事あるゝ流通
大隅ゆ之合祭して石ゆ〻〻社家就を今の冨岡八幡宮是ゆり粗書き事ハ
其書ふ以ゆるゝ大意を志るゝ
寛治三年の夏御宮の宮日光御社条中ゆ同ふまゝで給ひ天下安全の御祈
念あるとおりゝゝ寺院の御祿
永き代の栄久〻きこの宮に恵を垂せる神ぞきの国
立ゆゝ岩船の松ゆるゝて栄ゆる御代ハ永き代の寺
當社四隅鎮守　恵比須宮　丑寅　摩利支天社　未申
荒神宮　辰巳　大勝金剛社　戌亥
ゆの四社境内を離れ五丁三町の間ふあるゝ
寺院　功德院　多門院　吉祥院　大勝院　海岸院　愛染院
歌紀撰　正德の比冨岡女と云女の船諸の宗匠三十六歌の撰をゆるゆるゆ

どいうて出はのこまを

海へ妙音院殿より新たに橋この勢　常盤潭比

一のそを居社より三四町西ふあるさけ所ふ永代寺の函丈有古社名居より

門前へ町家茶屋多く鱧蛸蛤當所の名物あり

以上江戸砂子

以上紙鉄砲こと秋冷を長ふ出安来を賀ふ出を八月十五日深川八幡三

十四年目参詣を殊を今年八月廿九日ふ出を像図不浄の寺を用帳有く依く

を服ひいたんをあ〜さて七月末より祭番付賣出るく〜を所伝ふ

踊子の毎衣類十三品甚多ふ二十四品又日本一の美女十二初ふ出を〜小野

小町と号〜云奇怪の人あり又婦人を刎髪させ髪延ふ伝ぐ町内の技能の

ふ〜又業平忌を拵ふ言懐来英國事言語を絶ありとふ出ふ五

節句又を十千十二支十二月七福神あるど思ひ月ふ出ふ洋刎大きあるど

去る廿六日ふ十九日ふ出ふ當所神輿三社共八幡宮共二を

一

太神宮共三八春日宮とあり外の名ふ礼八諸ふ神社あり深川八橋ふの

往来群集ふつき早朝より神輿渡ふ古例のまて既ふ當所輿舁百人

ばかりづつまて揃ふ出ふ三社とも動ふを輿より水のまを事行の

如〜ふあり暫く有く漸舁揃ふ不春日宮の輿八後ふ出ふとやふ怪稀の

事ふあり見物〜大喧嘩こてあり発と洋〜ふあり又昊霧後迄ふて

神行の前後並ふ神酒一吸も出ふ〜拵ふ〜ふ不書と唱〜こ羨ふ

十九日ふ祭を祭集をあし〜ふ橋ふ渡ふを礼ふ橋ふ渡ふを礼ふ人〜を

見物ふ拵前幸不去ふ〜橋辺ふて十七八歳の女前を切落ふ礼ふ出ふて

是〜来る人ふ多ふの人ふ出ふ歳拵ふ橋ふ一番の者〜を引出せ〜を

を出ふ渡ふこと言程こて所を工作〜声ふて又向ふ人ふ出ふ鉄

棒をふり上〜打ふ〜ば橋の上〜迄ふ出ふ〜ふ八橋ふ出ふ

橋ふ〜ふ一下る強〜四ふ十二号ふ出ふど二ツふ拵て長ふ出ふど又流ふ押

長ふ礼ふ人数ふ〜の面ふを橋ふ渡ふ〜と唱礼ふ出ふ偽ふ出ふ

はしらを船の押もはなす又中程が落〳〵と知れ赤をさしてかぐらも
はなり又は踊動よそほひぐ〳〵の怪我ありとや巻ゑよ武士橋船のもがみ
つきかをぬき振上〳〵きりをとりて支度藤だなやを抜さいと云程をそ
はもく〳〵西をさして迎ひとは仕る助らを〳〵人〳〵いくだ〳〵の気をたとり
御ゑ船の御の働き美人の手はなりをぬく〳〵
一 家根船を艪橋の白鷺よりうるふは船もぐんぶんつくるもとり
一 其をふ長合の舟ども数多の人を助け〳〵人〳〵も疲人多〳〵
一 西御船のうりもの蔵〳〵船ふて引揚は働接拝の中有難き事なり
一 又自分とわづを小人多〳〵とぞ打節引ふて揚り場泥深〳〵腰ぶけぐら
と義る
一 右之方引汲とゆぐも水大深〳〵志摂程の雨ふて悪濁りをと迎須瀬ふく
回廻り橋も打〳〵修復有之ものゆへども向ハ古橋ゆゑぞ コヽラ落字アルベシ 逝テ可考
人数大積り橋壱十二ヶ中ヒろ程は坪数四十八坪但一坪老若二十人浩九

九百六十人は同ヒ九ヶ六百貫目程但壱人十貫目平均ヒ落九
人ハ知ル
一 早速川中の船御用船ハ出引ふけ流ふ〳〵人御助ありて怪我人ハ十が一ハも及ぬぞ
と是 御威光の義有ヒるりと人〳〵感涙せ〳〵ぞ
一 十九日四ツ半時怪我人五十人ほ〳〵ハ宿ハ八ツ半時八十人ヒ〳〵百八十人程とゆ〳〵
一 廿日朝三百人余内女八十人余同日但島をみく揚ケの人七十余人とゆ〳〵
右ハ〳〵百人程とゆ〳〵右内ハ八合快も多ヒ〳〵
一 永代橋白〳〵藤簀を張怪我人を揚げ醫師をとケ気付ハこゆ〳〵醫師
〳〵ハ腰ふて腰〳〵手義をつけ使ふも薬掛ケてあぐりハ〳〵入口ハ泥鰌之通
り見ぬを制〳〵公當り有ヒるの斗入をハこゆ
一 大橋も既ハ落きふつき人間の右橋ふて人を計ゆゑハ船ヒ深川ヒ不一面
のふて深ヒふ場ふ人多〳〵

一 十九日ヨリ廿九ッ時迄佃島猟師（ヲ　仰付縄張の地にして忽百人脇も掘ケル由
同日終夜掘〳〵となり
一 同日夜入ヨリ人〻多ク出テ江戸町〻通の人紙幟ヲ行ク雑踏通ルこと
家毎〻ニ詰ケル人数万億といふ事を初テ又通の無通二番ヨリ三番ヨリと
通ルさなり江戸中の騒ぎ人命ヲ救ふ事を願ふ事中〻筆舌ニ尽シ難シ
一 紙幟ヲ張リ幟ヲ立テ行人を利害ヲ問ふ者ハ絶テ明朝の届
〻ハ〻ア〻ニ出ル所行合ヲ以テ通ル〻ハ〻ア〻ニ出ル
一 入水の内ニ竜宮ヲ模シ四挺内ニ怪物人ありと云テ男女十三
人ありと云〻
一 然るに婦人仕事師のまたんきせるヲ抱のもの有テ小抱ヲ届ル
一 小屋の内ニ老女一人ニ十歳の女子と女子ヲ一人合ノ俵ヲ掘り老女の俵の
屋行の系図と書ル紙ヲ添セ置ル内ヨリ又ハ四人の士の帯ヲ十家斗の男子右
のものを掘ル〻ヲ上ケ置〻となり

一 麻布ヲ者近所の者迄ハ〻ヲ信ヲ人ニ〻〻ヲ沢ニて子細ヲ申聞ケ掘〻
ル様ヲ張〻入ル〻ヲ〻〻
一 ある男実ヲ助ケ他人の子一人ヲ共ヒ中沢ヲ連さけびハ〻ル迄ともるる
ヲ〻ヲ〻ヲ助ケ川ヲ流ル〻ヲ
一 ある橋ヲ通ル十七八の女子一人流ヲ〻ヲ通ル人ヲ〻ヲ呼ヲ水
中ニ入ル〻ヲ叫ヲ年寄の子ヲ恩ヲ〻〻見知ル〻ヲ
出ル〻ヲ〻ヲ〻ヲ
一 ある女房水ニ入ヲ失ヒ死ヲ〻ヲ
一 神田ヲの人男子二人同ヲの人有テ〻ヲ〻ヲ迄ヲ〻ヲ
出ル〻ヲ母ヲ人居ヲ〻ヲ表ヲ〻ヲ
中ヲ母ヲ母ヲ大ヲ流ヲ出ヲ〻ヲ〻ヲ
ヲ〻ヲ〻ヲ二人ヲ掘ヲ〻ヲ母ヲ〻ヲ

一　神田きのとの泥まぶれして橋四を牡ひ歩行し人を初め人宮を伴ひ行者牡ひ乞ふやと言ひ自身高人水にて死せしと出れば町名なるこれせしこと

附り乞ふてくらふ時まゝある事あり先年ある主つあげる船の船を打前まゝ船個島くゝ里人問いたれの人あるやと出人物と文字をかゝれしあるして是を見れば田中と斗記しこと

是まの橋名なる事〳〵是つき事あり

一　澤川高橋きの出船船頭とやは者人水にあるゝ水る功名あれと女子二人をくゝとゝは兄弟親和迄て伊勢やは行果ゞ嬢とやは是百禮為らして米金千分車まて為ゝ〳〵とやは患の中ふかやゝふ德ゞ人ゝもあり是仁心を天の助るゝやといへり

一　或若堂橋前に二丁程ふて押人きの四五年くも衣類をぬぎ捨て人二人あるゝとやは胴巻老女一人は三人を股引よ取つ出見居とゝ岸の下の人

ちぐりは程ふ深く素ふ流水中をもぐて雖ゝ岸ふより三女を助ひとり岸の人の念を思嫁の働きといへり此若堂泥の中をもぐひよ這とゝ〳〵見へて茶ゝんのうけ又陰のうけの疵あるゝ胸脇ふゝす疵数ゝ有ゝとあり

一　怪我人出屋の門盜人油ひ為ゝふゝるとあり

一　ある老女孫三人五更のゝゝ漸ゝ〳〵ふ陰りふ歓びゝゝ定絶して大病のよし

附り老人ふゝ寿山ゝふ概ふ少せまゝき事とやゝゝ人孫三人ハ別条なき中ゝ人ありゝゝ又ごゝゝふて雖ゝ〳〵あるゝ出事ゝ

右ゝ雖ゝし病ちゝゝ疵又ゝゝ岐ゝ中又ゝ疵ゝ年ゝいゝゝ為ゝ

ゝ時ハ自然ゝ見居有て宜しのゝやは可心得の一条あり

一　或人為ゝ三人をあゞんゝして大勢ゝ為ゝ出ゝ行ゝとあり

附り橋ゝふ大井川橋の川銭ゝゝ為ゝて人を流ゝ為ゝさゝゝゝ

ゝゝふ流れ強人の為ゝ水を流ゝ出ゝ行ゝ川ゝ

助けんとせしより是をもふりかへりまじき覚悟もなかりしや一命を捨るもの也
右之類数多有之中に進みし人の罪を記さば聖人のいましめ不知文人の心をあはれむ
心あるものは級されども仍筆に記し中にも此外の事は一蔵事もあれど其外の此者用
有之候へ共いづれも別条無之由此度の事故新に大名家にて御奉行辞集申候　此上
家用之節は當家様へも御出之節は門前出候事故若き人は本家なくとも思ふ
べければ實に我身のうへは是等は門前も多く候へば其身自ら慎て可然候也

八月十六日

存命　三百四十人

溺死　四百四十人

助人数　七百四十五人

助船　百四十四艘

右者町奉行より御老中へ書上之写

右蜷川家より借り写

大江廣覧

橋おちし折りの事こそおそろしけれ世は常なきをしるものから

北越蒲原産二平復花乃斎なる

文化四年八月十九日富岡八幡宮祭禮怪異

一　春日社壇鳴動

一　撞楼堂人なきに連夜おのづから鳴

一　御神輿舟にて永代橋下へ出深川越中島町より出る八幡御旅所春日と
次第に並て奉る恒例ことごとく行列たがひて三社ともに深川又は所々にて
まつりを執行し剰八幡の宝形の上にかざり有物を此社よりはづし出し候ゆゑ
さしあたる猿田彦の役人御舟より神輿よりまで給ふ時人もなく常より
重かりければ御供なども心もとなき気色も雨もなく此ぬぎ立ち素面にて鉾を
つき供奉せし輩も多く人の見とがむるも無ようやく立ちしかば
後は供奉せざりしとぞ神輿還御の後程なく永代橋落て人多く死せ

思ひきや秋の嶺中北風の吹くるぬ人をも水くさるものとべ〜とハ
板に橋杭壹丈三尺地中ゆ〜〜十余日を経て〜いろ〜御をめぐらせこれも一本も
ぬきびたをぐ〜ゆかり金輪際よりもくさりこと〜
後世九月十七日風雨の日二本ぬけ翌十九日又殘り四本ぬけうこと云
右四条　霊岸島町の住吾友軒の記
深川冨岡八幡宮鮮殿ふ張出せ〜書付を写
文化四卯年八月十九日　西川権写
来十九日當社祭禮也軽重服并觸穢輩不入来入
右表石の鳥居のうき橋ふ杭ふ書〜一ツ有り
祭禮役割
榊
大鼓　清水屋
大鉾　宇兵衛
家主　小右衛門
家主　茂兵衛

白幡
御弓
大拍子
書給長持
御幸社
御多鮮
御幣
御幸社
御幸社
御太刀持
同
御輿蓋

家主　壹右衛門
家主　辰兵衛
社役　久兵衛
外四人
家主　佐七
社役　久兵衛
近江屋　佐兵衛
外五人
家主　又八
家主　清吉
家主　平次郎

賽錢箱

大神宮 御弓鉾

御幣

大神宮

大神宮 御太刀持

同 神輿臺

同 賽錢箱

大具座 久五郎

三河座 久左衛

家元 忠助

社役 嘉左衛

外五人

家元 長左衛

家元 与左衛

家元 茂右衛門

八百座 次郎左衛

三番座 長右衛門

春日宮 御弓鉾

春日宮

春日宮 御太刀持

同 御輿臺

同 賽錢箱

御獅子踊

御膳掛

仲町家元 善吉 八

社役 芳三郎

外五人

家元 源次郎

家元 和右衛門

平蛇座 利左衛

茂座 茂五郎

平左衛

外六人

善助

清八

御祭先見廻

賽銭箱

賽銭箱

右之通お宮ゟ

月日

八文字屋　庄九郎門

社役　久兵衛
外二人

三右衛門
外弐人

一　當社神輿の長持ゝ破損ゝ

新找町通
花屋の話

橋ハ深川のうちゟ通き七間のる二ツ落て断くるはるとうと判張ハ
ハ寸ハ時ハ

一　右國橋の東ゟ麦阪をかゝきうとれるものハ通き麦ト師
を使ひて吳服屋の番ゝと右國橋をとゝう霊岸島のうゝ東ゟ

永代橋を渡りて橋より落て死せりとゝるハ橋のあるありてとゝゝる
橋の西ゟとりて又あふゆゝとて死せり事いるある周縁ゟ有ゝ人
かの壹下所のうゝかゝもの人ゝ右國橋の麦阪邯鄲の粟の阪
とゝかゝゝうも差のうきもゝ

一　牛込山細工町ハ八十八とゝゝのあり祭見ゟゆもて橋のゝゝ落ゝゝ
あゝふゝゝすうて家ゝあゝゝうゝとゝゝ同月ハ六日北九流町ある
里野氏ゝ古井を掘ゝゝ其の僕井の中ハ地を落せゝときて知ハ
時ハ八十八階ゟ縄を付て井の中ゟいりてこれをとらんとする古き井
を麻坂を以て掘りゝる差ゝる感じて井ハ落て死せり人ゝ行ハて助
ハ面のうゝふゝのかゝをとゝうゝゝうど息絶てかひなしこれゟ三日も差
事ゝあゝん井の中ハ入ゝと差見ゝ事ありあど人ゝもかゝりしとゝ
とゝもかゝゝうも水ゟ死をゝき命ゝとゝもあゝん
市ヶ谷九円坂ハ陶器のゝゝゝゝを焼捨ゝてかゝとゝふ世を渡ゝりのあり

これも橋より落んとしてかゝるおりふしいとけなき女の子ゝの落るをあはれとたすけ入りて其親をとへば其の辺扇屋なりといふこれいざなひゆきて其家まで入れ死せる者のよみがへりし心地して悦びあへりかゝる徳あるひとなんおりおり行ても子なみの[illegible]をなすべしといふにさせるのぞみもなしといへばさらば二三日過てむかへまいらすべし親族をもつどへて祝ひのせんといふその日になりて親族より使ひてこれが礼をのべきこふよりしてかの娘の伯父のつかひに数々いれて共によしみをむすびけんとて酒食を[illegible]しなることぞ親族いまだ富貴にして白木屋などいへる家もとりたる女の子なりな齢ひ十四となん

一 本郷に住める麹屋 市人姓名未詳 祭りんとて本国の橋のこなたに来沢町より材木をかゝふに懐にせし紙入の袋を盗人にとられけり袋の中にはぐ金二両二分ありもちたりしかばおのが家にかへりてふしぬ夕さ人のいふを聞きなが永代の橋落て人々あまた死しぬといふをきゝこれはさいはひのことまで命をたすかりしとなのがたきことありしにあくる日つとめておのが身より本郷にすめる何やかやしなる者きのふ橋より落てうせてるをさがすをおのがむきよりの此所をとふあつまりて市令廳にあるむきてあたりの事をつたへしかばその紙入の袋はこれなるべしとてかへしけるにもよりなく袋の中を見ればこまの数も全くありこれは盗人のとりゆきて懐にせし侍にて橋より落しが袋の中に何やかやしといふ者のある所にのせておこせせよりは失しこの釈氏のいふ所の観報応といふものなれどあはれにさやかにむくひし事末の代のよききいましめなるべし

一 亀沢町八百屋の娘の死骸をうけとり家にかへりて一夜家内泣きあかしけるが夜明てよく見れば衣類は同じものなれど縁付を違ひ顔色もかはりける所に見れば人たがひなるべしと又々永代橋のもとに行てまの死骸と取かへて二度かなしみを増ることとなん 活靈使満の

右七條　杏花園主人記

芝口壹丁目の川岸ふ小西屋といふ酒家あり頗る福有る者なり
父はうゝ老うゝおろゝして何禅門とやゝ喜孫を清次郎と云ふ清次郎
こゝふ家名の通り名すて宣きうゝふりたゝ年りうんばさ孫こゝ十二三
軍ありうんど窮乏化りまうとうんうゝ家業備をつゞせ別家のあうゞこゝ
あゝうゝこゝゝの源川茶さ死ゞゝふ記うゝうゝといふ沙汰ゆて自ゝいさ
のうゝも思たゞりうんどかの孫ふ見てうきだあうりうて西屋源居うひゝう
ねてさうゝぞき出うりけあゝうゝ大うゝ舟うゝの家うて舟ふてゆうゝいゝたる
そうゝうゝゝきを小西ゝ家の捉ゝうゝいゝうゝ俗宜の事ゝすゝも舟ふのうゝ俗ゞ
きゆふりの不男まゝでも撰民をうゝうゝねゞうゝふいひうゝていゝゝ舟を
恐うゝ家法ありうんゞ今ゝも老人ゝ空ゝふて行うゝふ永代橋を脱ゝ
うゝうゝうゝんとうゝうゝゞゝ國ゆうゝうて出うゝうゝ見物のゝゞ一ゝふ集り
ひひて踏ゞゝうゝん人あゝふさゞうゝけ橋抜りたゞゝうゝゞゝ十間ゞうり
うゞき舟ふて数百人おゞれ死すけ附ふ家の小西ゞゝ俗七八人も望ゝゝ

舟人ゝうゝゞ老人ゝうゝ舟のあとかつきゝうゝ悪舟とゝ男ゝ引ゝうゝうゝてかゝうき
命をいきれど窮乏の孫を眼の前ゝ失ひて為も見ゝゞゝゝふせり居ゞゞ
清次ふうゝうゝて死ゞゝりゝゝを中ゝゝゝるゝゝおゝゝとて業ゞゝる見ゝんゞ牧ゝゝま
ゞゝあゝゞゝふ見ゆゝうゝゞ抑け老人のうゝふてあゝうゝ前の清次郎ゝとゝふ
男八明和六年の春伊島の沒年將の孫ゝき船ゝほゞりて人ゝゝゝ死ゝうゝ俗
家会せて死けゝゝ板舟ゝ毋ゝ家ゝゝ事ゝゞけ一家ゝゝ忌嫌ひゝ清次郎と
いゝもゝ後中絶ゝりゝゝを出ゝゞゝうゝの名絶せゝゝうゝの又川ゝてゝうせゝ事ん
いゝゝ因縁ゝゆ有ゝん板舟窮ゝこゞ舟ゝゝうせゝんば思ゝ徳つきて
ゝうゝゞゝうゝてあうせてさき肩ゝきゝ男ゝゝゞゝ貧窮ゝて命を
失ひゝゞふ沒ゞゝりゝゝも皆前ゝゝの宣ゝゝゝの有ゝゝゝゞ
永橋水谷町ふ板木商ふ家あり此家の行ゞゞ道番さきゝゝより隠ゝ書を
ゝちて張度二丁目ふ移小載ゆゝの扇を居のゝゝゝゝてゝれを商ゆゝふ
思ゝせて由ゝゝかの如を隠ゝ一意ゝゝ前の書ゝゝゆゝゝゝて目ゝゝを

亡きてことの外をさびるさまなるゆゑ女をいとゝ憐れみて事をきゝ
つけて奴の分ふ扶持をとれどそれこそいとゝ
なげ〳〵ていぶ祭れふあらんとも思ひゆゑ〳〵しきかげるねをいて
おいするがうるさくあるゆゑひとり留守〳〵といひけてふりの一人具して
出ぬるあるゝ所先べ出帰りてきてようるぬ事をもいひあらそふ
べきつらはきあるれば夫もまみて先〳〵の妻女のりとくるゆゑんびせるさ
あく家る有るゆゑる永代の橋為てんを〳〵溺をぬこきふさがる物お
どりて先人をもゝらせて見もるる小者い助りて妻い死ぬ亡骸を見ふ
悔かり〳〵事も忘れて泣るあゆゑ古橋と思ひるる斗りやうかの
女のもとふ妻の婿ちゝんてゝうゝ先〳〵げる打中りあるゆゑ家のうち
もさびしきあるりの人もやり〳〵いひさらぐゆゑその七ゆふ前るの夕の
る京橋のるより降いくゝもあゝ拜ゆり先てかの母様る世の新ふ集
るゝゝを所の者驚きるゆゑひもゝて掛ひやゝゝんい南のるをさして

みな死ぬるり是もまゝ亡妻の霊ありと雖いともなくおそりあゝり

一 京橋山下町ふ長屋久兵衛て脇を高ふ者ゆりけるゝ主婦が中ふ子と
いゝ者あるりんば睦ゆいひるゝ人のるを養るをぐき幼弟をして其る
四ツよッ斗りそいとゞかいゆゝ〳〵学ゝるんばまゞこゝ〳〵いりゝひゝゝねどいぞ
ゆきて祭るせんと思ひてゝゆゆ〳〵道のつゞもあゝぬ不手で逆ふ沿て背る
頭肩車ふ乗せて為んどゝをかゝゝ先〳〵連沿るゆゆ母も橋為ゆゆど
る涙るゝゝて二人共ゝ溺れ死るりさんどゝるをでかゝゝうゝ死いゞゝ
さゞりんば母ことの親ゆんを見て悲〳〵死中るも養ひ親のゝゝゞゝをよ
ろこびていとゞ泣るゝゝを

一 京橋銀座壱町目ふ三穂屋と云人形ゝせあり去年の春ゝでい振出所ありて
鼈甲細工を業ゝ〳〵ゝしが大火の後ゝる移り住るり父を定吉と呼島伊兵
の門人ゝて行るゝゝ隠居てかゝゝゝを名を観月と名ゝ〳〵歌を俳と
よみゝゝもきあるりきるりこゝもる家ふ為て死るゝを行くゝる古月の日見ゆゝ

まきらく目をこぞらるいく〳〵ゆるを合せ〳〵つゐらる〳〵みてるさゐ見〳〵ばるを
だろう多紀死體の中ふさるゐ〳〵ゆ〳〵るゐまく竹るもあるざり色さたるる
四人のむげけてるゐ変ふ色ても終りてれざりし事とは人ちりるゐ
い巻あひろりとあん

右四条　数寄屋町の侍狂歌堂の記

箔屋町伊勢屋三七といふ人の中ふ条八といふ者同町あるやもり師の
中屋喜右衛門が中ゐ市次郎博西町喜や吉兵衛が中ゐ泳三八同家の下雅
金吾と四人連して祭見ふ出ゐるぶ永代橋落て死人ゐふ川ゐ流人ぬけるも
ふ三八ハ二度まで沉ゐて流〳〵ゐるうるぶこてび見ふ橋落の中(溺)ゐ出ゐを
ゐりこびゐちを出〳〵てこれをゐ〳〵よといはせびゐちふゐりつきゐれバ人ゐて
いあげゐりとゐ相撲ゐかゐてゐれハかゐらゐてゐすゐるぬほれの者の事ハいゐ
ゐる國ゐんゐ者ゐびとひてゐゐびゐるものを見ゐてかゐゐゆきぬ大三三七ゐ
て殺ゐき右國橋を渡ゐるとゐかゐゐれど人つゐひて〳〵みすゐ〳〵ゐつ〳〵事

あゐ〳〵び急角〳〵てゐつきゐゐゐ死體ども水のゐちゐあゐさゐあんばゐぶかゐ
國て川ゐ入てさゐゐ見ゐゐゐさ三七が中ゐ条八ハ先のゐ北甲ゐ大文字を見ゐいま
ぎみ〳〵てゐりゐればゐれを走ゐ〳〵ゐ川ゐあげゐゐゐゐゐゐ師の中ゐ市次郎ハ条八
がすゐゐゐりつきて二人ともふ死〳〵てゐり金吾ハゐ〳〵ぶりゐゐぶこれゐ〳〵ぶふ
船ゐて〳〵手ゐ〳〵れ深川のゐ〳〵あゐりて一日深川のゐちを逆ひありきて病ゐて
ゐりゐゐゐび条八がゐ死ゐ所ハ大清の人まを出ゐゐ廻といふ廻りて者ゐれが娘
かゐゐゐ文字をびゐふゐりて立ゐゐゐゐゐゐゐ大立三七ハ尽く語樓亭と名のりて牡
丹をすきてゐむ男なりゐれが娘ありて相撲ゐせゐゐをゐのまゐふ書分亭ぬ
京橋松川町伊勢屋次兵衛が親業といふりの孫とゐ女とをつきて出てゐゐぶ
川山家人ゐ結ふ出ゐ義三河の国北屋ふて若き氏かつぎゐゐ事ゐどゐくゐひ
てありゐれバ付孫とゐ女をゐ去ゐのゐふゐゐみてゐちゐゐぎ〳〵て若ゐ者ゐ
ゐゐゐかゐりゐゐゐ

右所三丁目十軒店家ゐ九郎兵衛といふ者ゐを初きゐれて町内の書役ゐと

丁雅をつれてゆきなるを書役と丁雅とい水に溺れて死ぬ九郎兵衛は橋杭の
かをぐくふとりつき居るを橋のもとより縄をおろしとりつかせてひきあげるる
は九郎兵衛常ふ不動を信じ給ひ給ひ給ふ不動を信じ給ひ給ひ給ふ不動の縄
をやあらんと云ふるの人いひしるを聞

一

赤坂一丁目鞘師某ごろ仙斉といふ盲人ありて妻鞘師ふのざあるれて出
行るを鞘師親るいふ仙斉が妻ハ助平船のせられく先き命
ひろひてあるくとり来りて志ゆ〜おそろ〜きあをとつとく声ふるふ〜つ鞘
師を居るを鞘師の妻ふもちろ〜を来て我夫ハいうる我ふ為あどいひて声をそ
て泣ぎ給ひ給ハ仙斉ご妻ふ縁ふついとふもてあをとりあをとりて〜ふ
びるさるうきめをとんてより牡丹乳〜きり仙斉ハ盲人なれば牡丹を
拾ふ事叶ハぬゆゑて親の元へ〜癒ふさせるとぞ

一

横町ふ貧窮を富ふ某といふ者藤兵衛の娘を常ふかそ西ゆり
給ハ給ふ見をいぎ給ひゆんとをとも藤の家ある侍の妻を誘ひ逃るゆゑ是も

ともゆんとて中女を居をとをとるひゆきるを拾ひて死ぬ女ハ
葛西の者ふて おきるを付ハ行の山川ふもあどあびるんばかく〜ハ
べあどもりたんばあるをあるをあるをあるをあるをあるを船ふもり
つき先びのりるを打うち薬船を漕て通る者あり出者兵同じ村の者あり
名れハやうて薬船ふのせて居〜ゆきるるを

一

四ツ谷某横町ふ藤兵甲斐仙次といふ者いづれの家ふも出て居たいるを聞て
笛吹ふどとりてうちまやを吉をもをせり出去夫岸島より出る居さいる
ありてありるをやをいハ出まぐ永代橋のあるをみかりるを付かの橋ふて人
あるを義入ぬをとのてやうてやうのをとびありをぐかる所て水ふ入おるをめ
ぐりて男女七人まで ことをけをるをの中女を人為をけて橋杭ふとりつかせ
並ふるふ出女声をあげていうで家姉をうをけのくとい出をどいづをが姉ある
を志〜ハ先迎きをてうふうをびおるを女をとるくるそんがりとふ門ふ名れを
これが姉りて有るを出女い流芳の去あるとぞ

一
これハ爰を志れたり湊橋の辺にて子を売る老女ありしの母なる石仕ひ
たるありしハ此男に嫁たる者をつれて出たるがかの川に落ていりぬ此男常に
あそびなる川にてつりておのづ事に練じたれバ此附かのうをさし
あげながら岸につきて宿りへと皆ないひ帰りぬうぞ我命ハ海がたまりの
まことに家のうちの者どもこぞりて此男をなぐさめけれハこの男いひけるハおさ
なき附より川に入ておよぎてあれバようしらぬ事すとそへびしと刀自の
せつかんをうけてうち志たりのひき今より後我川にあそびてあそびあるん
まへそのびおとるにしの岸にまちのひて声をたてて泣ぞいひたるに
男のまなこいふ志たり数ありけん

一
八月廿日面郊なる武井某川狩に出たるに子供二人つれたる男舟をのせ来
りたるが網をかけたるに舟をよせて志ばし物語りしたる云たるハかの童ハ芝
に生まる者にてひきさきのふ此子供を連て永代橋にかかりておちたで過く
溺りてけるに也かと足に物のかかりてひきたるにとりあげて見てけれバ銭布にてハ
ひきあげき見れバ南鐐銀を包いれてありこれハさきに行たる人の
おとせるなりんと此欄干に結ひて置たりしとかしれバこどもが中にハかゝる
うちとしたる人の中にていづでもしものぬし此来りて取のべきこれハ志たりひて
所得に志なへといふてはなふさも志るんとそかの銭布に銀をおさめなどして
おるなど餓に人さわぎて橋番へりと帰に於きてかの子供を番所にかへて橋を
わりそもとの道へかへりぬひねこの銀を包ていざましうがたらし水に落
入て死なましをおもふに八幡宮のたすけさせたまへるなりとよろこんでは帰りけるに
とうふにもをこびかしにまうでけるなりとかたりけるこれハ武井氏の母なる
人おのれにかたりき

右八条

四谷門外新宿の住 六樹園の記

一
私に若七曲りといへる所にようし沢や吉助といへるハ牲名帛の畦成にてよりの
父みて齢七旬にあまりなるが七十年ばかりの孫を負ひて橋の中ほどにおるとき
孫志きりになきあきてそいしたへとりかかり老翁をとしもすゝむる事を

はぞ菩提これとあぐさあくれどもいまだ悔ずしてせんこうあく業
ゆゑ極楽とをれい橋い義こうりといくり菩提日は法華を信ぜ〜ゞ
日蓮の利益あるべ〜

一　芝片門前町同唐紙師石田表八郎こう者七軍の男こう親子住ひて仍
こうふ橋の上迎合てこうこゞ一つを見失ひこう主婦りこうこもこさゞ
歩んども尋えゞ幸こうゞて橋をこうこう人うゞ来こうゞとかゝらをめゞこ
て待合をこうこうも橋義ぬこうてゞこうみ海りけんばこうをむ有〜〜して
有〜〜家こう帰りぬ翌朝日有きかゝこうを聞おえて葬りゝこうあん

一　芝金杉一丁目宗安寺北新発意鶴死とをん

右三條　芝の住心陽堂の記

一　小田町ふす光ふ者一人のこうをなこう出〜〜亦〜ふの子見せんとて父母
こうゞ〜こう人こう一丁の脇をこうひてまこうをこう出〜〜めゝふ橋こう義て死せ〜
こうゞ父母の欲き大こうあゝゞとこう　金杉町そ

一　十軒店こうこうこうも二人だこうり怪事有とこう

一　堺町薬師原町新吉原だこうハ一人も死せ〜ものあゝとこう

右三条　篤谷記

一　小川町猪飼何某兄弟いひあらせてこうもゞ幸人つんこう祭うんこうそ飛
橋を通りこうふすゝ〜きこう〜て橋らゞんて義んとこう橋飼兄弟ハ
あいそ〜こう行のこう〜元けこうけ橋らゞれ義て去りゞハ水こう人兄
弟ハかゝこう命をこうこうひて宮ふこうりてこうりゞが宿の男を呼てかゝ
の事ありてかんが命失ひぬ不孝の事こうといゞが宿の男もおどろき且
欲てかゝりこうこう夜こうの刻こう表門をこうゝ去あり行きて門ふ入
こんばかの下敷あり身ハぬを引ひこうりこうこうして表こうふ〜てかゝき
めをこうんど人ふこうすけられて帰りこうこうといゝ橋ふこうこう物の見見れば
行ゞこうのゝゞ是ハ義人こう府人の死霊のこうこうありこれハ知こうひてりちて
呼つこういふを見れハ紙入こういふこうの二ツ残置文有けるハありさこうちゆふきあ

を見あらはしてかへりうちあそぶべきものあれこそうらやましけれ

右一条　楊柳亭の記

一　傳通院前表町大門より西の方横町五軒目右仕下稚十五軒橋より流て溺死と橋杭にいぐきつきけるを人々見つけ腰ふ単物織をつきて居ふこれをもとせしをやうやうとふるまうるうちいつの羽織を捨て幸うしてこれをしめ多すうり宿へ帰つるまくうれいつの羽織を捨て幸うしてこれをしめ多すうり宿へ帰

一　下富坂町佐野屋まさ清ふる歳一人溺死あり一説ふいはまさ清方へ白上列より張人まり前をでまさ清ふる立て逃こ道中の者祭見物ふ行橋より溺死

一　下富坂町建具屋亭ふい助り沖ふ一人死沖ふの宿ハ柳町あり

一　下富坂町糸屋又七ふ日町の角大のそばまでいしがふ張せ星ふ六筋ありふるぶ又七出際ふ出ふる流を追ふ四角大のそばより立てかへ星ふ

をいぐき連れ二人ふを溺死ふふふ逃迷のこひいきまふ一説ふ又七出際ふ南豫二枚張ふ目文ありしを南豫ふを救を宿へ張へ動弁ふ目文を

白木屋十兵衛
白木屋賣子ふ

銭布ふいれ前ふうけ死ふ又七いつも銭布ふ張南豫を入て行へうへ

一　傳通院前ふを廻ふ松右衛門ふ右げ義ふふへふ流草の小屋ふて右げハ

三三郎人水へ義ふうふ者水練達去ふりふふ右げハがあるまふ十二三斗りの童つまりふを右げハふの童へふつまりふ

いふへ又七ふ斗のふの童ふとりつきふう彼右げハ童を行るまへ五つを

おきふふい童ふ反つをふる角大勢右げハが見へふりつきふれがもあ

やふふと御へまふひのけつかへて叶りこひふへおるぎふふかの七ッ

斗りのおきふふ水へ義ふうやふへふへふまへこうふふかひふみへ

片ふりて水をうき義へつきかのふがるども二人をあげふて助ふふハあ

かへて蘇生かの郎人小屋へ帰りいれへふ大勢ふり醫師ふ見せふれば

これいとてもたもとうじ山をすみきるもれがいんとも茶も及だで
義あるうの所をもて殺死せ〜彼子供の親兵尋ね〜ふ死せ〜すをゆて
ほいあ〜思ひうの非人の施をのあり〜て行つく供養せ〜とこそ

一　芝高輪のあるじ〜が夫婦ふ子供十女壱人水ゆる所ふうしふ此十女主婦
子供をつがなうくをくひくをけうり此十女房別あて海をのかせぎ行あを
あんせ〜ちかく有とあん

一　蘇倉河岸よりかつぎ元助とて使者行り此水練よくせ〜迎あをを
かつぎ元助とうしば大勢此所〜時却帰通りうるをそ其事衣類を
ぬぎをて水をくぐるあるうをちくて〜ををんとせ〜ふ水の中あるを
めきさけぶをるふをすぐりてきすの元助も引るみれば数人九度ふを
出入〜〜九人すひをけうりとゆの〜

一　大勢却〜うり将棋倒〜うりも安〜大勢水〜所ある時ある侍刀をぬいて
ふを〜ふ〜ふ〜ふれい是を見て数の者押かけびりるを所程水を

一　通をうの数ふべううだ

一　是いかる歴〜の中女中奥方をも芝〜き用人いる前の子供を連〜ぶ
残〜び水〜所ふう彼用人をふ〜ふの如ある所まの先ふ女ふををひ
奥方をれふをけゆせ〜がその内我ふいちれば〜て死せ〜之一説よは
奥方銀田家の怪我陽のをりをあ〜せちれいよう〜まつがあ〜こいう

一　行をの田舎人ふ金ふ三百あるりちく溺死是い其節同屋そ仕切金を文兵衛
りちけうを

一　人形町茅場茅屋の向ふる屋ふ見せすて油のちんぽうを高ふ者あり
毎日六七貫ふるあ又い人のさうりふ所い十四五貫文も所ふをふ此所
び家をかく〜ふ〜て十二十三あるうと数合男のみども三人溺死せ〜親の
ふ〜ふいう斗ふあ〜うりうん九月十八日品川十ふ宿の浜はてんぽ〜ふい金剛ふ坂孫ふ屋所経蔵伊勢屋ふ蔵と云りの〜ふ〜ふ世をゆ〜ふを

一　後日房別の浦ふ〜とりし溺死の屍二十ふどいづれも女ふ〜ふ男ハ人あり
でいあ〜といふ

一　細島すべて戸八十人ばかりあるべし　内男八二十ばかりなり

一　神田蠟燭町　名主平田千五郎　室町　名主加茂三郎兵衛　西川町　名主竹口
長九郎　雑子町　名主秋葉助九郎　佐八番屋敷　田町一丁目　名主川津十兵衛　新
草屋町　名主井村宗次郎　以上六人名主ハ不殘流死して　佐の方ばかりなり
なりとも殘りて佐六人ばかりハ殘溺死　西川町　名主竹口長九郎　佐二番ハ
若狭明日の信ハ伊勢へ行ハ　行ハ番屋敷　佐二番ハ
主殘　信ハ　溺死せり　とぞ
以上　鉄砲町　名主　脇某　直殺　あり

一　祭礼川　前の町々　お船　永代橋ハ橋造りも忘れられて　多の
ほうこう大勢群集　そこへ車おしてふる者　こうハ橋板の上通して
竹の簀をしきばたらく　橋ばかりこも人の怪我有　色こうばそ　角つ
せられば　今三千五　夫墜の　こうこうだ　川の　西町　今二十五　川の　流川
今二十ばかり　流川　長崎ふ及　こうふ　今二十ばの費　今出来　新　破損と

一　水道町　濱松屋藤三郎　名古屋牛込　揚場　の若旦那　利兵衛と　以者と　幸御　小船寺
とり　紙屋の　妻　と二人　連　て　水　流　こう　小船寺の　溺死せり　三河屋の若い
りのいい　こう　ゆる　水道町　者屋　又九郎の　流の　三河屋の若い

これを小船寺の番屋と評せり　ゆ　番屋　あり

一　佐通院　辰巳や　義　昊　屋　島　神　橋　仕　と
橋　ばかり　いと　あり

一　八丁堀五丁目　ある　人　水　流　ば　水功　左　と　と　と　後日名を
ゆべし　八丁堀川　長　橋　途中の　流

一　箕輪　関亀　助　孫　藤　安　中間　主人　水　流　ば　御　と　橋　板　つ
まり　長　り　こ　ま　同　家中の　妻　主人　水　流　長　ば　中　ふ　ま
れ　と　と　ま　き　こ　つ　り　れ　ど　中　も　命　ば　ば　て　橋　板　ま　り　て
せ　ん　と　ま　中　ま　是　を　寿　の　毒　ま　お　り　ど　お　ま　を　と　け　と　と　ま　も

此歌れば行方しらずと云づくもつるりくる足をふり上げ
ふうせうちもしをれ紅葉りんぐとよりやく中るゝ為にとびのり
ゝをうりるゝを夜中る為ゝ水ゝ流れ忽大熱後ゝ彼女は
ぎゝを中るふ死つきるゝとあんの中るいゝありんるもわ
八重川白菊の疾

一 武州八王子張人四人八王子近村橋村の者二人同ゝ村といふ所の者二人都合溺死十人の中也

一 江戸吉原京千条角条掘るふ永代橋をゝえい今の橋ゝりて渡し
あり

憲廟文政ゝ橋出来ゝ結願人ゝ紀伊国屋吉兵衛ゝ帝上野中堂御建立寄中ゝ右ゝ人結合金ゝ
八ゝ中堂の殘ゝ出ゝ思ひの外ゝ人ゝ入ゝ橋出来ゝ
ゝ人の利ゝ吉百二千ゝ完ゝ

結願人　金沢町紀伊国屋吉兵衛　亀井町松屋十右衛門

今ゝ結願ゝ
燭ゝ斗余義せゝ世ゝ進人ゝ
ゝれゝ文中秋とさせゝいゝ

右二十一條　小石川白壁町の住西川権の記

一 余若ふ信奉ゝて若衆の邸ふあり私ゝ
し人東西ゝ
さゝびゝ声中ゝと
屋ゝり橋杭二ゝ殘りて同数十二同
方ハ橋杭一ゝゝきれて
八月十九日深川富岡八幡宮のまゝ
義て溺死ゝ見ゝの群集
見ゝふ破壊のゝ
市屋ゝ入ゝ

一

の橋りきの為ふつそうち橋をこそう絶ふより我が町の橋りき絶をりこ
さんと橋ふ皆のぞやんとそこ時義人くりゆくふ南北新堀新川昊屋敷
の者別条あ〜〜とい〜溺死の数をこそる舟ゆく船いりと知こそる数男女百
十七人今町没人より書てりそ服洛ふつれ流れて知れざるのいくぞく
あらんと語る四〜〜市中の橋り親こそ見弁親族朋友手ふそ安否をとひ
彼いいふ是いいふ拝いひ〜〜東西南北より奔走をる有こ法こそあ〜ぬ橋へ
の幸心邦の話

右二條　田安藩中中村氏の記

一　墨廿日町の名所を紙のぞりよ書く地川図をあ〜〜私四十艘斗も見の東
岸提所建〜〜所こそ橋あ〜〜有り所の者こ岸ろが武士の十五軍
あこそを侍のいぞきあぞこ死〜〜居こもあり為ちりめんの衣服をそこ安
むねさけてこそこそ出てこそもりの中この橋橋ふ流こて若旦那二人
まで不せ〜〜と法居こそ有〜〜と

一　橋度さ巾間の不長さ十二間わこ長こたれば九人数十人陸入れせ〜〜あら
べ〜〜

右二條　深川柳川町の住玲氏の記

一　萩野美長が同小谷長者町ゆそ家とい〜こ髮結の妻七歳の男子とこに
キの女子をこれて祭見ふ出永代橋をこそる七歳の子い橋は橋今ふ義し
こそこ法ぞ〜〜とふこそ出あこそこの人〜〜のこそりのこそ行ふ行ゆふきことのりこそ
もり〜〜こそ〜〜ぞふ義人ゆこで親こそ三人一所にこそ〜〜ゆ〜〜とて
ちこそ〜〜こそこもむ〜〜ぐこそ人こそ知こて見人〜〜ぞ赤屋敷〜〜ありいまこそ橋橋こそ
ぞぞこそりぞふ橋義こそりと中〜〜ハ嗚呼ありこそぞこそ

一　三宅直幸が同紀伊殿の侍醫服部養安といふがこそ日毎こそて橋こそりりこそ
〜〜こそんとすこそ水色猟の外りりゆ〜〜この橋ふ変異有で〜〜いふこそこそ
こい〜〜船ふい行幸こそ出べきこい〜〜変ふ行の侍ふ行こそ〜〜こそ溺りぞせこそ
かへり〜〜がりぞゆ〜〜橋あち人死せ〜〜といふ

一

或候の藩士某橋を渡る人のあるに事よりつゐあらば橋をのがれ
ゆらめきすらすらとうごみ出どもそこを拾ふおぼゆれんばかりしくいはせたり今や
絶命するにいはれあんばことと思へなくおちなをそこをそこをば
こおりひて後のすをかくぎんとするかぐむ事叶はざるおどおどもく免
られんとするを前よりかけてつまづりぐもを引きあぎたりうくかくげ力の
小鉦をきて大あを掌ふようゆひつけを獄をうろうろむねるまりてふ
ところを結ゝあいあや藩ゝ藩ゝとおりふけふと藩ゝ人ゝ藩人の水の原
みや有ゝん今ふゝる藩ゝとおりふけふと藩ゝ人ゝ藩人の水の原
さすゝるぞゝゝも藩ぬと見へゝゝいぞやあゝんとおりゝる流るを原ゝふ
ゝて溺れんぞ見をぬんとすゝるあゝふゝるゝべきゝのゝゝあゝゝゝり
むゝおり藩ゝ人両のゝのごゝゝゝゝゝ藩ゝゝ人をゝゝゝふせゝんを
力ふぬんとすゝるぬゝゝゝ又藩又ゝちすゝ人の三人ゝゝゝゝゝを力ゝゝてか
らゝじて見をぬき溺ぎ出んとゝゝゝゝゝたゝの見ふ人二人をゝりつゝて溺れず

一

ゝきざゝをさゝや芋るぬゝて おゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ浮ゝゝゝゝ面根船の底
根の流ゝふゝふゝつき陸ゝあゝりゝのゝゝゝの人家ゝゝ衣類をゝゝゝゝ
ぬゝあゝゝゝ人のゝりふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
九人さゝこゝゝぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
芋のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一

神田小駿新道ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
遠中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

身をうけるといふ家身元などあらばともかくもせ侍し廿才さへあればそこを
あせと雜られひあぎきてもあさば足の力をきりたてふりもちいれ雜多年
ふ志づみねさて身ふうきけの世られて家よくりられ四方ゟ雜をこゝせし
このたりてふるひありきしとぞ神田仲町吉来氏の話也

一 本所石原にすめる孫三郎といふ者母をまうり見せむやとて永代橋の北の
かたらの髪結の家をかりて川ふのぞめる所より落く見しこそこの者の子
がいふを聞けば橋のくづれしを志らで跡よりおし落されしと人々のいふは
あやまりなり先橋くづれんとする前に橋の上なる人のむらがりし中へ東岸
ゟ祭り物すて人をこらしめられば西岸よりきたる人ハこなたへあつまりぬされば
くづれし所より西ハ人のおしあふことなかりしなりされハとくふみ入て
忽ちくづれしにあらざればけつくそのきわよりてうりのも立退きてのがれし
が多かりしと板のあはひのきれたる所より足をふみ入て起しがれひぢをおり
袖ちぎれなどして溺死よりはかゝる身をやぶり血あへぬる人多かりし女の
ふさゆるなる髪のたぶさの欄干に残りて身ハ落入しなどもありしさて
大かたおちて入くむらがり落し末ハこなた人のたる所のやうしといひき橋
落る時白刄をふりて人をよけさせしといふがありしやと思ひられハ知らず
といひき

一 両国検校の志たしき友の三人まで水のあはときえしその内壱人ハ笛の友
まてきのふしもといひきて譜うつしひなどせしをのちハむなしき人と成てそ
吊ふたんざくに書せて川よながせしとぞ

橋ハよし中々たえぬともうつせ川そゝぐ人のりはつる中ハなき

一 何がし候の留守居某妻子僕従をともなひて祭見に出て永代橋を渡りし
が某ハ十歩余り先にすゝみ妻子ハおくれてあゆみしをあひだくづれ落て
りまに見ざりけハざる程安き心もなかりしが時過てあひくてよろこぶ事
かぎりなしあらたに酒肴まうけてことぶきし時ゆきあハせしといふ人の
物語りなり

右八條　神田の後輪池老漁の記

一　番町の人にのぐが家の舍人関といふものの使氣あり客をはりを客
坂田清二郎といふさもらひ八月十九日永代のあたりに尋る人あるとて船ひ
くぶきふに深川八幡の祭りあり人々の人よりそそりて彼も道の
つりぞえれば橋を渡るるふ橋ぐちろきて渡入りしに坂あるどのぞそ
おくるに水ゆるのるに斗あれば船くもどうとするふ大勢のあるひみて船より
ハひくものかりれば心あるべも脱ゆ踏ちぐしてかるに水ゆるのりるを迎
るふるぐてあるて常ふる強力を接出せ橋板ぐずとつきてこれをカコ
ちぐりるりればそのかくの人ふうの強力を見ておそれて道をひきれば
からしぐて助をて息つぎたくぞうるること同し食客がるる
水道町ふ三河屋といふものの代利兵衛といふものまりるふるりして
船ぐるぐ是もるる義人て義のかくあぐ異ふもるる水のりてあるの
ふるしるる水ふ流ぐるぐる知ぐぐりしぐひるものあるるて水をかきれば

一　ひとびと水の面ふうびぬるり姉と切りふるもふあるる大勢取つれて
又ふの中ふ渡しふりカを出して助りるるしふ角をるるもふ又るも出る
しふるびふ橋板のるるくぬれればカをさふ見て抱つき居るりるの水ふ
てるをけらるるてりと利兵衛ぐ強るるを
服金蔵町ふもるる義支郎有り常ふ三郎ふの裏門前るるもてるの芋ふ三服
ふりげてをぎるひとりこぼしきるりふりるこりの娘をば成武家
ふるやづくぜ兄ふるふ若の冨豊流るるるる時兄きれば義も
張りふく悦びりりは妖懐妊ふて有るふ彼ぐ父母のいの中れば異事を
かくして親の兄よ祝けられよるる養人とてこぐふあと嫁るるり彼
義娘とるるよ義りふ出るるふりるる死るるとるりふる人
きて人を雇ひて屍を屋ひ来りるぐ老母うふるるるる事をおそれ
てかるるて流る告ていふる橋義て死るるる人殿るるるの義ふり
も彼ふ人どもいまぐ張りふりるるぐ生死の程もおぐつるふるれ彼て

年ゝと思ひ〳〵どもをしつらひ事ありそとのかゝる事あげき
ゝ所に我もらひも詮かうぐ〳〵といひゝれバいくぐさる事ゝれんとそゝく
うけ書ゝりうゝ屁をかきいれてあゝくゝれバを終夫が屁ゝ出ゝき
うちゝゝきゝんどしていふゝぐ嬢をこゝ〳〵つゝこぐものはゝちゝゝるゝぐゝ
のゝゝりて所ずゝるりの男されば始ゝ家ゝゝる事なゝゝをなどかゝる
ゝるまいをそゝゝのふゝてゝぐもれども元きゝぐ物ぐゝひのゝゝるのゝゝりて
やまぐゝゝゝん

右三條　小田向の殿白水子の記